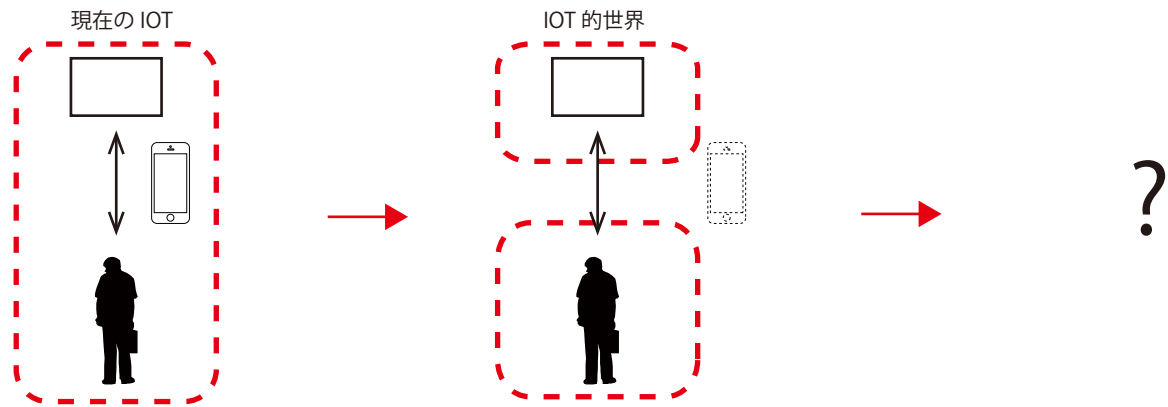


電梯の解体

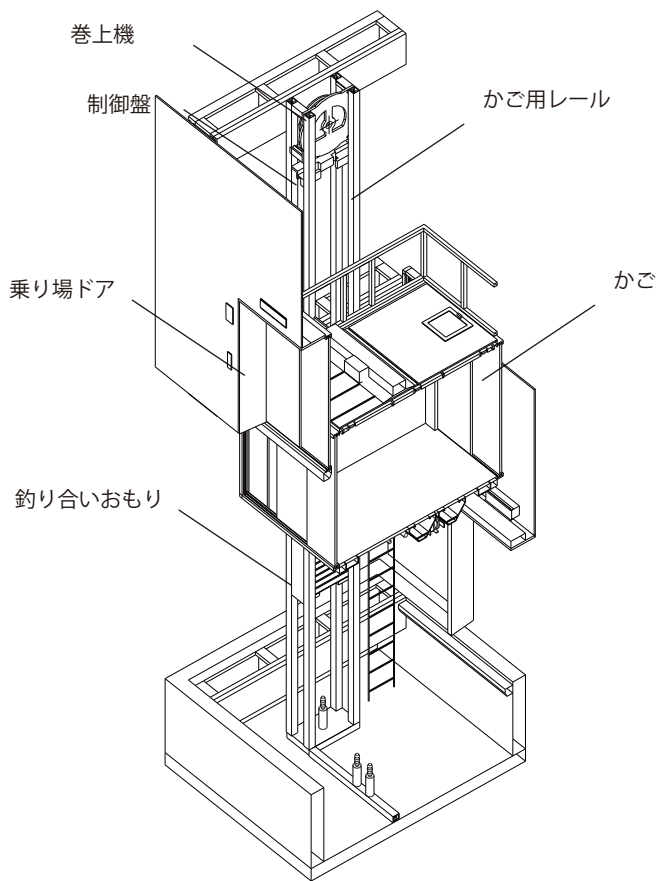


1-背景-IOT的世界-



現在の IOT は人間がデバイス (スマートフォン等) によりインターネット化されたモノを操作する事を前提に考えられている。しかし高度に IOT 化された社会では、人間が操作なしにモノとインタラクティブに繋がる事が可能である。ではエレベーターが高度にインターネット化したときにどのような形態をとるのだろうか

2-コンセプト- 電 梯 (エレベーター) の解体



ロープ式エレベーター

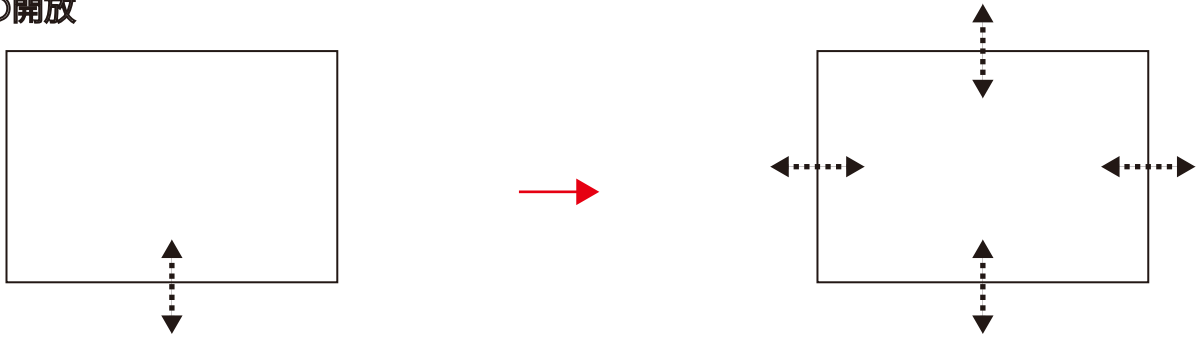


一カ所に集約されるエレベーター

エレベーターは建物の規模が大きくなるに従って必需品となった。現在の箱型エレベーターはその合理性を追求した結果である。一方でその存在は建築空間の中で隅に追いやられるものになってしまっている。今提案では現状のエレベーターシステムのメカニズムを考察し、IOT 化による可能性を検討したい。エレベーターという箱を IOT により解体し、単なる付属品ではなく、建築の空間構成要素として押し上げる事を目的としている。

3-1 提案 方向性の解体

① 入り口の開放

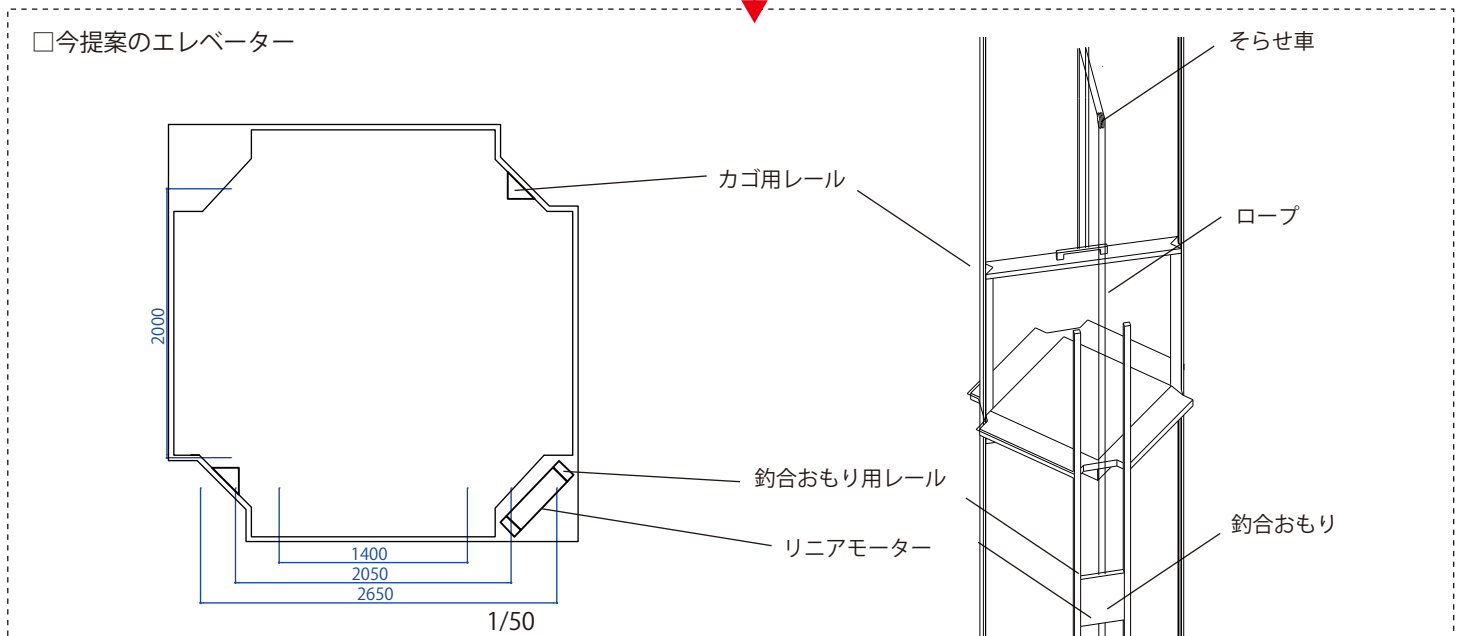
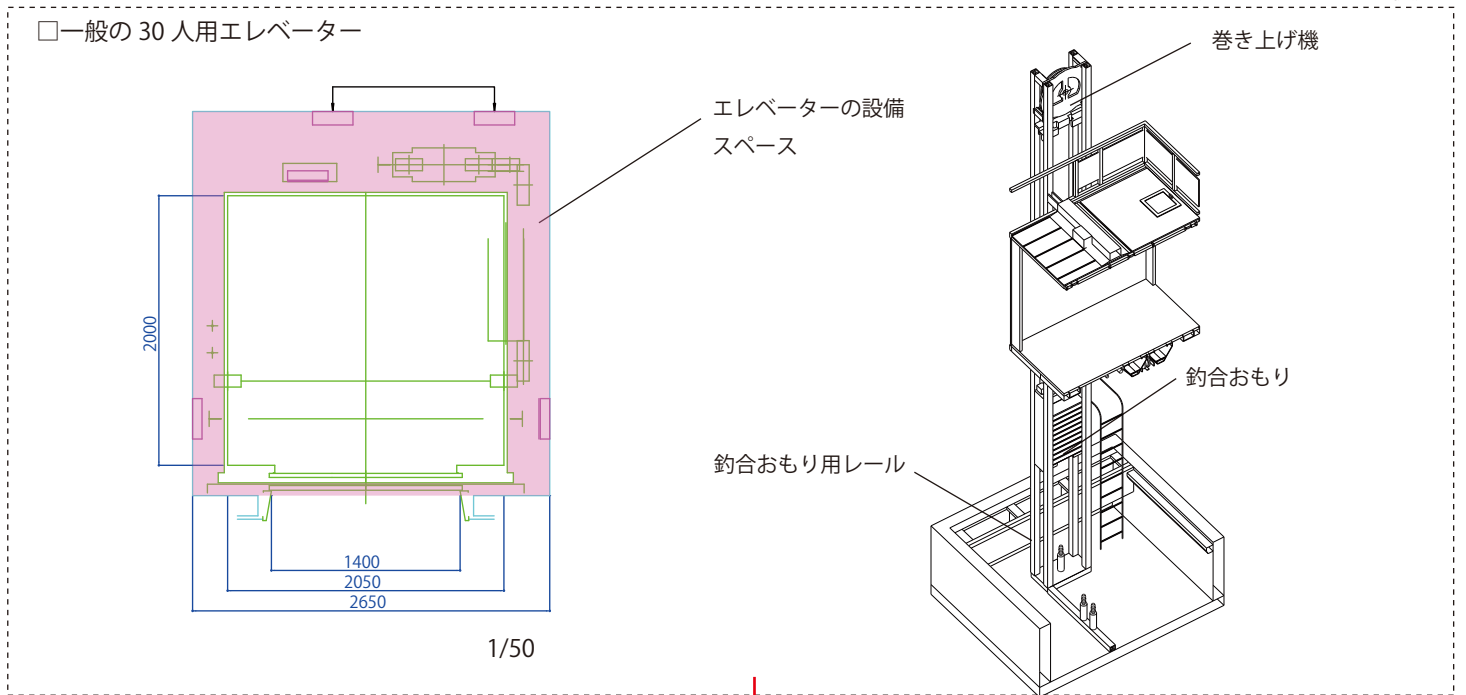


エレベーターの入り口は1つである。きわめて合理的であるがこれがエレベーターの可能性を狭めているのではないだろうか。今提案では単一方向でないエレベーターのあり方を検討する。

② 対角配置による四辺の開放

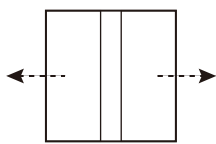
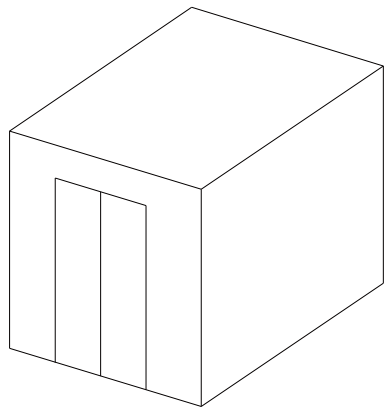
多くのエレベーターではロープ式が採用されている。そしてつり合いおもりやカゴ用レール等のスペースにより2辺もしくは3辺が塞がれる事になる。今提案ではカゴ用レールやおもりの位置を対角線上の四隅に配置する事により四角形の4辺を開放する。

※提案では30人用エレベーターを使用

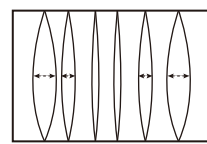
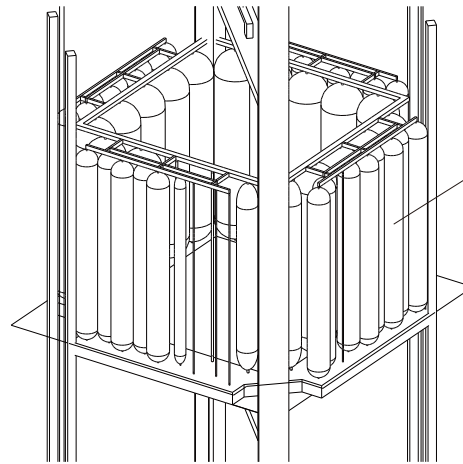


3-2 提案 lot 化するインターフェイス

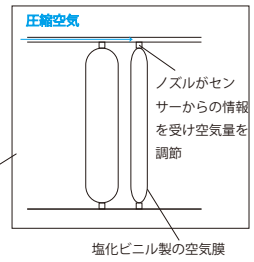
①呼吸するインターフェイス



面的なインターフェイス



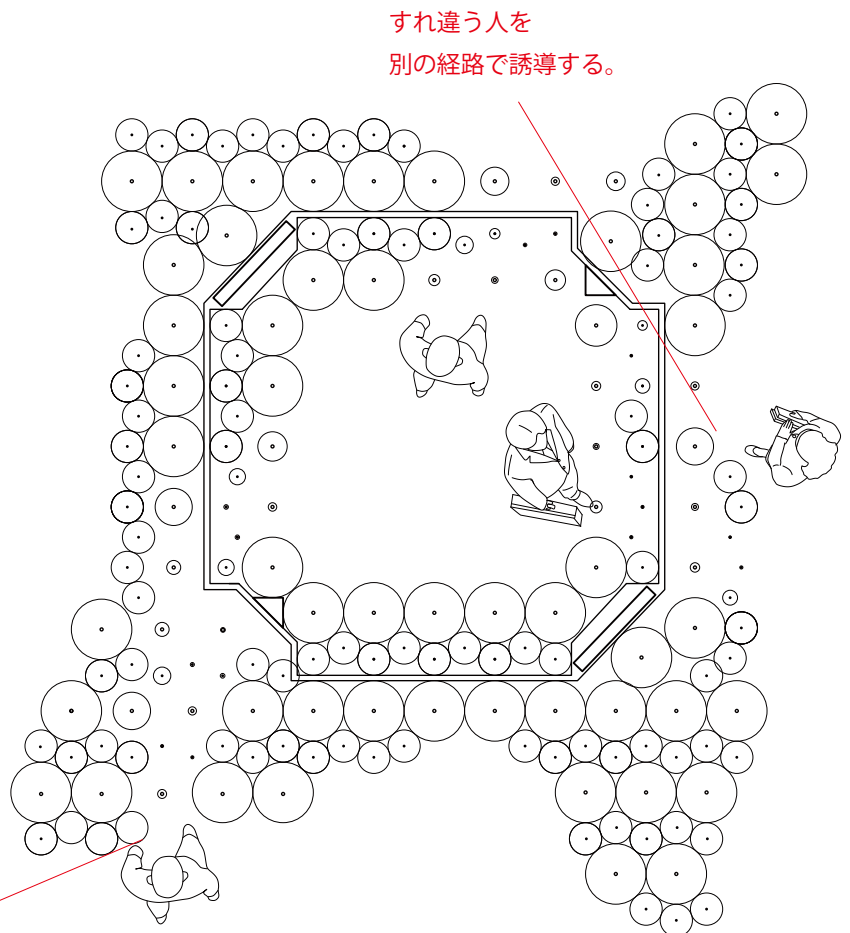
線的なインターフェイス



通常のエレベーターは横トビラ式の面的なインターフェイスである。私は今提案で線的なインターフェイスを提案する。センサーを内包した空気膜でエレベーターの周囲は囲まれている。天井面に取り付けられた感知センサーにより空気膜の空気量は調節されエレベーターの入り口が現れる。

②どこでもドア化するエレベーター

この空気膜はエレベーターの外側にも延長していき、そのためエレベーターの壁、ドアとしての機能だけでなく空間を仕切る間仕切りのようなものになるかもしれない。上の階に行くためにエレベーターに並ぶ風景は無くなりどこでもエレベーターに乗る事が出来るかもしれない。



すれ違う人を別の経路で誘導する。

その人の立ち位置からエレベーターまでの経路を最適化してくれる